英語多読授業の通年実施について

On Extensive Reading Classes in Two Consecutive Semesters

伊東　英*・柴田純子**
ITOH Suguru and SHIBATA Junko

１．はじめに

岐阜大学における教育を論じる際に，本学の「中期目標」の「Ⅱ－１　大学の教育に関する目標」を確認したい。

○教育方法に関する基本方針
＊講義を中心とした受け身的な学習スタイルから主体的な学習スタイルへの転換を図り，課題発見能力や課題解決能力を高める。
○教育方法に関する基本方針
＊様々なメディアを活用した教育効果の高い授業の展開方策を確立する。
○教育環境の整備に関する基本方針
＊e-Learningによる自学自習の学習環境整備を行う。

また，本学の「中期計画」の「Ⅰ－１　教育に関する目標を達成するための措置」を併せて確認する。

○教養教育の成果に関する具体的目標の設定
＊日常的なPCの使用により，IT活用能力の強化を図る。
○授業形態，学習指導法等に関する具体的方策
＊様々なメディアを有効に活用することにより，学生の勉学意欲を高めるとともに教育効果をあげる。
○教育に必要な設備，図書館，情報ネットワーク等の活用・整備の具体的方策
＊ITを活用した教育システム構築のため，情報ネットワークの活用と機能の充実を図る。
○教材，学習指導法等に関する研究開発及びFDに関する具体的方策
＊情報ネットワークの充実により，メディアを活用してe-Learning教材を含む教材開発を進める。

これらの「中期目標」,「中期計画」に掲げられた教育に関するテーゼを実現することが，本学の教育改善に直結し，学生の勉学への取り組みにも好影響を与えることになる。本稿で扱う英語の多読とは文字通り英語で書かれた本を大量に読むことを意味している。その方法論は具体的には以下に論じていくが，上で紹介した本学の教育に関するテーゼと矛盾したように感じられるかもしれない。しかし実際には我々の授業は学習者中心で，かつ本学LMSであるAIMS-Gifuを活用した，十分に上記テーゼに合致した内容となっている。

教育学部生涯教育課程の総合言語文化分野における英語多読授業の導入は平成19（2007）年度で3年目となった。この契機となったのは平成16（2004）年度に生涯教育課程が従来の7分野（心理発達・生涯教育システム・情報教育・国際理解・健康福祉・芸術教育・環境教育）から現行の3分野（心理発達・生涯教育システム・総合言語文化）体制に移行したことにより，授業科目を再編成したことにある。総合言語文化分野では英語の基礎力を学生に身につけさせることを教育目標のひとつに掲げ，新たに設けた総合言語文化分野の1年次対象前学期開講科目「英語リーディング入門」（担当，伊東）の授業内容として英語の多読を採り入れた。

平成19年度から1年次後学期開講科目「英語リーディング」を柴田が担当することになり，これを機会に授業形式を従来の精読から多読に切り替えることで我々の意見が一致した。昨年度までの「英語リーディング入門」を受講した

* 岐阜大学教育学部生涯教育講座
**岐阜大学教育学部非常勤講師

学生の反応から，多読授業は学習者にとって英語に慣れるとともに親しみを持つようになり，さらには英語圏文化に対しての興味を抱くようになることは分かっていた。しかし問題は，「英語リーディング入門」終了後に多読を継続する機会が持てず，学生に多読がなかなか定着しなかったことである。今年度から1年次前・後学期を通して英語の多読授業を開講できるようになったので，本原稿締切り時点においては後学期の中途ではあるが，多読を通年で実施する試みに関して，授業方法・学生の読書量・学生による報告や授業評価等を報告する。

2．英語の多読学習

外国人英語学習者用に段階的に語彙や構文（文法）レベルを制限してテクストが書かれている図書をgraded readersと呼び，それを用いた英語の多読学習は現在ではかなり一般に知られるようになっている。その多読学習を従来の英語教育とは異なる視点から組織化し，著書やインターネットのホームページを通して多読による英語学習法を普及させたのが酒井邦秀とSSS英語学習法研究会であり，また英語教員向けの雑誌『英語教育』2004年2月号において100万語多読が特集で紹介されたことが，学校現場への多読学習が導入されるきっかけを作ったと言える。『教室で読む英語100万語』（酒井・神田，2005）には多読授業の実践報告が紹介され，全国の高等学校，高専ならびに大学で多読の実践が行なわれていることが分かる。学校現場での実践が一番熱心に取り組まれているのは高専であり，沖縄高専や豊田高専など，画期的な授業実践を展開している。実際に授業で用いる多読用図書を高校時代に英語の自習用教材として読んだことがあると話す学生が受講生の中にいることがある。ただし高校でのその教材の使用法は宿題として夏季休暇中に1冊読むように指示されるような，必ずしも多読用図書としてgraded readersを使用したとは言いがたい状況が現状である。

そのSSS英語学習法は読書の楽しさ・持続性・スピードを重視して，多読を効果的に実行するための以下のようなユニークな「英語で読書を楽しむ多読三原則」を提示している。

①英和辞典は使わず，日本語に訳さない
②わからないところは飛ばし，わかったところをつなげて理解する
③好きな本を読み，つまらなくなったらその本はやめる

特に際立っているのは原則の③であり，とにかく自分のレベルに合った，面白い本だけを読んでいく快楽原則こそ多読成功の鍵になると説く酒井の論法は説得的である。この多読三原則は我々の授業においてもそのまま採用されることとなった。従って一般的な英語クラスにおける教科書を使用した一斉授業とは全くスタイルを異にし，現在全国的に小学校から高等学校までの多くの学校で実施されている朝の読書活動にも似たような，個々の受講生が自由な読書を楽しむという形式で授業は行なわれた。ただし，朝の読書活動においては読書に関する記録をつけるということは強制しないが，英語の多読においてはどの本を読んだのか，個々の本の語数とそれまでの累計の総語数はいくらか，あるいはそれぞれの本にどのような感想を抱いたのか等を記録していくという点が大きく異なっている。この読書記録をつけることには，抽象的な読書行為を目に見える形で確認できるという大きな教育的効果が見込まれる。なお，主に英国の出版社から出版されているgraded readersは年々質量ともに充実し，日本はその重要なマーケットのひとつになっていることは確実である。例えばPenguin Readersは2007年版から裏表紙に従来からのレベル表示に加えてその本のテクストの総語数を表示するようになったが，これは読んだ語数をカウントしていくという方法を出版社側が意識してのことであろう。

なお，原則の③を貫くためには多読用図書を十分な数だけ取り揃えておく必要がある。現在受講生が利用可能なgraded readersは，大学図書館と伊東研究室にほぼ同じシリーズが用意されているので，全体としては約1300冊である。（表１）これらの図書とは別に柴田は必要な図書を自らクラスに持ち込んで学生に使用させている。

表１　利用可能な多読用図書

graded readersシリーズ名	冊数（概数）
Oxford Bookworms Library	180
Oxford Bookworms Factfiles	30
Penguin Readers	350
Cambridge English Readers	70
Macmillan Readers	40
合　計	670

さて，読書そのものは個人的な活動であるが，クラスとして運営するためにAIMS-Gifuの掲示板機能を積極的に用いることで，クラスとしての一体感を作り出すことが可能となり，また途中で多読を諦める学生もいなかった。読書を中心に据えた授業時間中において受講者間での意見のやり取りはほとんどない。しかし自らの読書活動を記録することを含めて掲示板に書き込むことが学生相互の意識を刺激し合い，また推薦図書の紹介などはその推薦者個人の性格も表れ，それらのコメントを読むことが次の読書への意欲を掻き立てることに繋がることもある。SSS英語学習法研究会はホームページ上に掲示板を設置して多読に取り組んで人たちが自由に意見交流できる環境を整え，このことが多くの人を多読を介して結び付け，学習の成功に導いていると言われている。同様のことが我々の授業ではAIMS-Gifuの掲示板を用いた交流であると思われる。

以下に前学期と後学期の多読授業の実際を報告する。

３．多読への誘い（前学期）

生涯教育課程1年次前学期開講の「英語リーディング入門」では授業の目標を，英語に日常的に触れる手段としての多読を習慣化させることに置いた。従って厳密な意味で所謂，学期始めと学期末にある種の検定試験を課して，その試験結果に反映されるような英語力の増強を直接目標にしたわけではなく，結果としてそうした英語力が得られれば良いという姿勢である。まずはまとまった量の英語を読むという読書行為そのものに慣れることが，「英語リーディング入門」の目標である。

今年度の受講生は生涯教育課程1年生14名，他学年の同課程学生3名と生涯教育講座1年生8名が加わり，全体で25名であった。これらの学生の約半数が英語免許状取得科目を副専攻として履修している。従って学生の層は生涯教育課程ならびに生涯教育講座1年生がほとんどであり，彼らは比較的均質な集団を形成していると言える。また英語免許状を取得するための英語学，英文学ならびに英語科教育法の必要科目を履修するために，英語を学ぶ目的意識の高い学生集団でもある。

３．１．授業内容

授業の実施方法に関して，授業時間内と授業時間外に分けて紹介する。90分の授業時間を概ね3分割し，初めと終わりの35分程度は読書時間に充て，真ん中の20分程度を語学学習や英語圏文化ないしは読書に関する話題提供に使った。また授業時間外の活動と繋がりを持たせるために教室でAIMS-Gifuを使用し，掲示板に寄せられた学生のコメントを紹介しつつ，教員側から質問に答えたり，推薦図書を紹介したりすることもあった。90分全体を読書に充てることは，クラス全体として緊張を維持できないこともあるので，途中で教員が話す時間を確保することが効果的であった。

３．２．週2万語の読書量

学生には毎週2万語を読むことをノルマとして課した。2万語という語数は，100語／分の比較的ゆっくりとした読書スピードで読書した際に3時間20分程度で読み切れる分量である。すなわち，受講生が読むべきgraded readerの選択（難易度や興味関心）を誤らずに，毎日30分を読書に充てれば十分にノルマを達成することが可能な量であると言える。さらに授業時にも読書時間が確保されているので，受講生が英語多読の意義を理解して読書に取り組めば毎週2万語は妥当な読書量であろう。実際，今年度受講生25名中このノルマを達成できなかったのは2名だけであった。（表2）

表2　「英語リーディング入門」基礎データ

受講者総数	25名
週２万語達成者	23名
標準累積読書量(14週)	280,000語
平均累積読書量	339,425語
最高累積読書量	556,484語
最低累積読書量	220,230語

３．３．AIMS-Gifuの活用

読書をすることと並んで，その報告をAIMS-Gifuに投稿することも課題とした。AIMS-Gifuの掲示板に毎回の授業に関するコメント欄，1週間に読んだ読書量と読了した図書名の報告欄，それと同じくその週に読破した図書の中から推薦図書を1冊挙げて，その書評を簡潔に書く欄の３つの書き込み用掲示板への記入を義務付けた。（図１）授業について毎回コメントをすることは，授業中に教員が話した内容に関して書かれることが多く，そのことを通じて英語学習ないしは英語多読の意義を徐々に理解していくことが謂わば学習に対するメタ認知ができることになり，受講者自身の自己学習が容易になると思われる。また読書量と読了図書名の報告は，自己学習の確認であるとともにノルマ達成への義務感を想起させる。そして推薦図書の書評は受講者相互の良い交流の機会を作り，書評コメントには他の受講者を意識した内容のものが少なくない。このようなAIMS-Gifu上での交流が週に一度の授業に加わることで，英語多読共同体とでも表現できるようなクラスの多読への一体感が構築され，このことが学期末には多くの学生に多読の達成感を抱かせる大きな要因になっているものと考えられる。

最後の授業時間に対するAIMS-Gifuの掲示板に寄せられたコメントから代表的なものを抜粋して紹介する。

学生A：

大学生になったら自分の自由な時間が増え，読書もできるかなっ♪と思っていました。でもなかなか自発的に読書をする余裕がなかった中で，このリーディングの授業を受け，多くの本に出会い，読書する楽しさを実感できたことは，私にとっての財産になりました。

学生B：

自分がこの掲示板に書いてきたコメントを読み返すとほんとにたくさん読んだなぁと思います。

ただ英語に触れるだけでなく，楽しみながら触れることができたのは大きいと思います。

自分は英語教師をめざす人間としてこういうことを大切にしていきたいと思ってます。

学生C：

今期，多読をやってみて，語学って語彙や文法だけではないなぁとつくづく感じました。高校生の頃は単語テストや長文読解などを嫌々やっていたけれど，楽しく読むと自然と身に付くということが実感できました。多読を行うことによって，子どもが言語を覚えるときの方法と近い学び方ができたのかな，と思います。

学生D：

「大学生になったらたくさん本を読みたい」と思っていた私にとって，この授業は大切で，ためになるものでした。この授業がなかったら，私の電車やバスの通学時間は，退屈なものになっていたと思います。わからない単語が出てきても慌てることなく，その意味を考えようとするくせがついたし，知っている話を英文で読むことで，別の力もついてきたと思います。

学生E：

慣れるまでは大変だと感じる時もありましたが，週を重ねるごとに少しずつではあるけれど，リーディングが以前よりも苦手だと感じることが少なくなりました。さらに，自分がこれくらいの英語の本（といっても，せいぜいレベル2くらいですが）なら読めるということがうれしく感じました。

３．４．成績評価

成績評価については，週2万語の達成（累積読書量），AIMS-Gifuへの報告状況，授業への出席状況ならびに学期末のペーパー試験の成績を総合的に判断することとした。累積読書量を成績評価に反映させるべきか否かについて議論がある。累積読書量を成績評価に直結させることが，学生に不正な読書量の申告をさせてしま

う懸念があるとの指摘であるが，これは上で紹介したように，AIMS-Gifu掲示板を利用した各自の読書ペースや推薦図書の書評等で受講者は日頃から互いの様子を熟知している一種の多読共同体が形成されているため，学期末になって急に読書量が変化するような学生はいなかった。互いをよく知らないクラスの場合には不正申告も起こり得るかもしれないが，同じ課程・学科に所属し，十分な情報を共有しているクラスでは不正申告の心配はほとんどないと言える。また累積読書量だけで成績を評価しているわけではない。

図１　AIMS-Gifuの掲示板

４．自己モニタリング的な多読への移行（後学期）

後学期開講科目「英語リーディング」においては，英語力のさらなる向上と並んで，学生が自己モニタリング的な学習態度を身につけることを目標として設定した。個々の学生が，自分のリーディング学習の進行状況や達成度を客観的に把握し，次に読むべき教材のレベルと量を自ら設定して学習をすすめ，自ら達成度評価をすることで，より主体的な学習ストラテジーを身につけることをねらいとしている。さらに，受動的に課題を消化するのではなく，英語教授法のひとつとしての多読学習システムの目的や方法を理解することが，教員を目指す学生にとっては特に重要であると考えた。また，１年の終わりにはgraded readers のような教材のリーディングを卒業し，オーセンティックな本を自分で選び，教室を離れて英語での読書を楽しむリテラシーを身につけられるよう，易しいペーパーバックを学科で準備，紹介し，希望する学生には貸し出しを行った。

後学期の受講生は生涯教育課程１年生11名，３年生２名，計13名であった。受講生の全員が前期の「英語リーディング入門」を受講し，毎週２万語のノルマを達成している。この授業を選択した主たる動機は，「英語教員を目指している」，「前期の授業が充実していたから」，「必修なので」など多様であり，基礎的な英語力に関しても多少のばらつきが見られた。

授業は，後学期を約１か月の長さの４つのタームに分割し，各タームの中で，まず，1) 測定テストを実施，次に2) 測定テストの結果について自己分析を行わせ，翌タームの個々の学習プログラムを作成させた。その後各自が3) 学習プログラムに基づいた多読学習を行い，１週間ごとに達成度自己評価をして結果をAIMS-Gifuの掲示板で発表した。

以下にその詳細を報告する。

４．１．測定テスト

各タームの冒頭の測定テストは，「graded readersのどのレベルを」「どのくらいのスピードで」「どのくらい正確に」読めるかを測定する目的で行った。問題は，Penguin Readers の Level 0 (Easystarts 200 head words), Level 1 (Beginner 300 head words), Level 2 (Pre-Intermediate 600 head words) の３つのレベルから，1,000語程度のテキストを各１編ずつ抜粋して使用した。受験者はそれぞれのレベルにおいて，設定時間内に何語読めるかを測定し，続いてテキストを伏せて内容把握問題に解答した。問題はテキスト200 語読み進むごとに１問が解答できるよう設定してあり，日本語による記述式である。問題例を末尾の資料１に示す。このテストで受験者は，0, 1, 2 の３つのレベルにおけるそれぞれのリーディングスピード（語／分）と正解数のスコアを得る。

４．２．結果の自己分析と翌タームの学習プログラムの作成

受験者は，テスト結果をテキストのレベル間

で比較したり，過去の自分のスコアと比較したり，また，前タームの学習の進行状況を振り返ったりすることで，各自のリーディング学習の進捗状況にについて分析・考察した。その上で次タームの具体的な学習プログラムを個々に作成し，毎月のリポートとして提出した。

例えば，Level 0, 1 では，ほぼ満点であるのに，Level 2 においてスピード・正解率ともに落ちる学生は，次タームに Level 2 を中心に読む，またどのレベルも同じように読める学生はより高いレベルに移るなど，テスト結果を自分に適したレベルを判断する材料として利用する学生が多く見られた。

一方で，「この点を取ったらこのレベルに進む」というような一律的な基準を指導教員側が提示せず，あくまでも学習者自身が自分の次タームの学習プログラムの達成目標や内容を決定するという方法をとったため，「何を読むか」「どのように読むか」といった学習ストラテジーについても各学生が考慮をめぐらせ，診断テストの点数以外にも，教材選択の判断材料があることに気づいていく様子が，リポートから観察された。

以下に学生のコメントを抜粋する。

学生F：

今タームは前半にレベル２や３の本をうんうんうなりながら読んでしまっていたので，それは大いに反省しています。語数稼ぎになっても実力がつかないのでは意味がないので。

後半は公約通り，レベル１の本のみに的を絞って図書館にあるものを片っ端から読破して行きました。この「レベル１読み」は効果大で，今回のテストをやって思ったのですが，読むスピードが上がっただけでなく，正確さも上がりました。（以下略）

学生G：

ミステリー分野は苦手だなと思った。やっぱり興味のある，ないで読み易さが違うと思ったし，予備知識があるかないかで読め方もだいぶ変わる。

学生H：

ある程度の単語ならば英→日ではなく，英→英で理解できるようになりました！　進歩です。（中略）“レベルが高いから難しい”　ではなく，低くても読みづらい作品がありました。個人的には，主人公等の感情を推測できるものは読み易いのですが，客観的なことを述べているもの，第三者的視点から書かれているものは理解しづらかったです。（中略）来期トレーニングメニュー：週３万語を継続し，ペーパーバックの読破！！

学生I：

決めた目標で 100% を出せませんでした。読みはするのですが，すぐ眠たくなり，30分続きません。しかし，興味のある本は 30分読めたので，本をよく吟味して読んだ方がいいのかなと思いました。

学生J：

当たり前と言えば当たり前だけど，絵が多いと読む気になる。しかし，絵で先が読めるものは，読み物としてつまらない。

また，読書量のノルマに関しても，前期に指示した一律２万語ではなく，各自が自由に設定する方針に変更した。これは，クラスの中に，英語教員志望者など特に英語に熱心な学生とそうでない学生がおり，授業開始後半年が経過した時点で，読める量にもばらつきが出始めたための対応である。この結果，「週２万語」のような語数を目標にする学生と，「毎日30分」のように，時間を目標にする学生に分かれた。目標設定に当たっては，授業内において担当教員と話をする時間を設け，高すぎる目標や低すぎる目標にならないよう個々の状況に対応するよう配慮した。

４．３．学習プログラムに基づいた学習と１週間ごとの達成度自己評価

受講者は，各自が設定した学習プログラムの達成度を毎週自己評価し，達成率をパーセンテージで AIMS-Gifu 上で発表した。また，AIMS-Gifu 上で，「今週の本はどのように選んだか」「読むのがいやになったときの対処法は」など，学習ストラテジーに関する簡単なトピックを挙げて投稿を指示し，学習者間の議論を促進した。

４．４．評価

後学期の授業の目標を鑑み，平成19年度後学期末においては，以下の３つの要素を同じ重みとして，総合的に評価する予定である。

①英文の読解テスト

初見の英文をいかに速く正確に読み取るかのテスト

②授業への取り組み

自己分析に基づく適切な学習プログラムの作成，自己ノルマの達成度，授業／AIMS-Gifuにおける議論参加

③多読指導についての理解

多読の理論や方法についての論述課題

５．まとめ

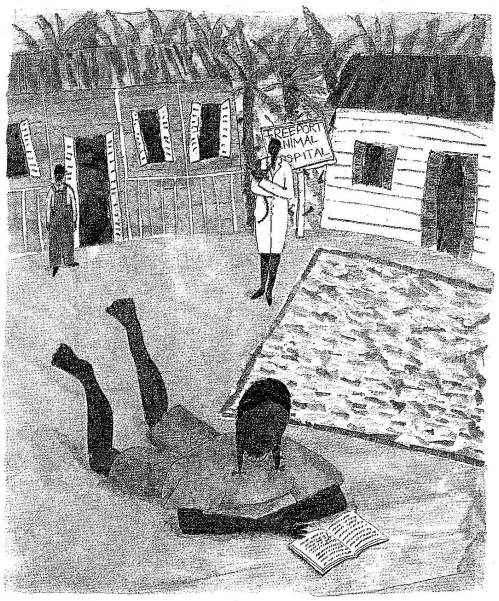
これまで見てきたように，今年度の英語多読授業は前学期の「英語リーディング入門」，後学期の「英語リーディング」と連続して実施することができた。昨年度までは，英語多読は前学期だけの授業であったため，授業終了後には多読から遠ざかってしまう学生も少なからずいた。今年度は1年を通じて授業で英語多読を実践し，前学期は多読に慣れること，後学期は自己モニタリング的な多読を行なうことで自律した学習者として今後英語を学び続ける基礎が受講生には定着したものと考えられる。

本論考の冒頭で，本学の「中期目標」の「Ⅱ－１　大学の教育に関する目標」と，「中期計画」の「Ⅰ－１　教育に関する目標を達成するための措置」の関係する項目を挙げた。我々の前学期，後学期を通しての1年次生向け英語多読の授業は，本学が教育改善のために目指している，「受け身的な学習スタイルから主体的な学習スタイルへの転換」や「様々なメディアを活用した教育効果の高い授業の展開方策を確立する」こと，そして「日常的なPCの使用により，IT活用能力の強化を図る」こと等が，読書という一見したところ「ローテク」な手段を用いた授業ではあるが，AIMS-Gifuの活用ともあいまって十分に「中期目標」，「中期計画」の趣旨に則っていると判断できる。

参考文献

1) 酒井邦秀(1996)，どうして英語が使えない，ちくま学芸文庫
2) 酒井邦秀(2002)，快読100万語！ ペーパーバックへの道，ちくま学芸文庫
3) 酒井邦秀・神田みなみ(2005)，教室で読む英語100万語，大修館書店
4) 英語教育(2004年2月号)，大修館書店
5) 門田修平(2001)，英語リーディングの認知メカニズム，くろしお出版

資料１：Level 0 (200 head words) 測定テスト問題例（部分）



Maisie King lives in the Bahamas. She is thirteen years old and likes pop music, reading and swimming. Her mother and father are doctors. They work at the Freeport Animal Hospital. The hospital is next to their home – a blue house by the sea. It is very old, but it is beautiful, and Maisie loves it. Her grandfather loves it, too. He lives with the family.

On Saturdays Maisie and her grandfather often go out in his boat – the *Warm Wind.* Maisie likes to swim underwater and look at all the beautiful fish.
One day she sees something – it is a piece of wood. 100
There are some letters on it: "*M..N...A*".

Maisie is very angry. She and her grandfather take the dolphin back to Freeport. Her mother is in the garden. 200
She says, "What have you got there? A dolphin?!"
Maisie says, "Yes. Can you and Dad help him?" Then she sees the big American boat. "Why is *that* here?" she asks. Her mother says, "There's an American in the house with Dad – Carl Flint. I think it's *his* boat."

Maisie runs into the house. She can hear her father. He is saying, "You want to give me $200,000 for the hospital and this house?!" Carl Flint says, "Yes. I want to build a big hotel here." Maisie's father thinks for a moment. "Well, the hospital isn't doing very well, but... 300
I need a little time." Carl Flint says to him, "OK – you've got four weeks."

That night Maisie looks out of her bedroom window. She can see the dolphin in a big pool next to the hospital. She thinks, "He needs a name. I know! Ben!!" Then she looks at the moon. She says, "Carl Flint *can't* buy this house. It's our *home*!" She feels very sad. Then she looks at the dolphin again, says "Goodnight Ben", and closes her window.

The next day Maisie goes to see Ben after school. She asks her mother, "How is he?" Mrs King looks at the 400
long red line on the dolphin's head. "He isn't eating," she says. There are a lot of fish in a bucket next to the pool. Maisie takes one out and says, "This is for you, Ben." The dolphin eats the fish. Maisie's mother is very happy. She says, "That's good! He likes you."

Three weeks later Ben is strong and well again. He and

Reading Test : Level 0 ―この本は読んだことが（ある ／ ない ／ 途中まで） **Name:**

Reading Speed: / 6 min. or 974 words for min. (wds./m)

1. 主人公の Maisie は海中でみつけた謎の木片をおじいさんにみせようとしましたが、おじいさんは聞いていませんでした。目の前のどんな出来事に気を取られていたのですか。

2. アメリカ人はなぜ Maisie の父を訪ねて来たのですか。

3. イルカが元気になったのに、Maisie は２つのものを失うといって悲しんでいます。何と何?

4.別れたと思ったら戻って来たイルカについて行った Maisie は、海中に見覚えのあるものを発見しました。それは何？

5. イルカとは結局、別れたのですか？